

第 4 号

1984年 6 月



〈発行〉

会報編集委員会

広島大学経済学部内  
広島同区東洋町1-1

## 1983年度大会報告

井上 洋

第12回をかぞえる本部会の1983年度大会は、広島大学経済学部において開催されました。「会報」第2号に御案内のとおり、近くキャンパス移転が予定されており、今大会が千田町キャンパス最後の会場となるでしょう。1972年度の第1回大会で会場づくりに加わった筆者としては、11カ年の1巡を経て、いささかの感傷なきにあらずです。この間、大会はいつも土地制度史学会との共催をつづけてきましたが、今大会は単独開催となりました。たしかに、本部会が独自の大会を開催できることは、成長という点で喜ばしいことです。しかし、従来、研究交流の少ないこの地域では、各地・各方面の研究者に御参加を願っており、会員諸氏のなかには両学会に所属の方もおられるので、地域の研究深化のために学会として御協力下さることを望みます。

大会当日の11月19・20日両日は、あいにく例年になく寒波が身に沁みましたが、参加者は、会員45名と広島大学大学院生・学部生10余名のほか、広島女性史研究会などの方々をあわせて、初日40数名、2日目30数名でした。発表者には、広島大学総合科学部小林文

男先生も御参加いただき、中国現代史1、西洋近世史1、日本近世史2、同近代史2、同現代史3というように、各分野から大変興味深い御発表をいただくことができました。予定では、広島大学文学部谷山正道先生が、神尾春央の増徴政策を中心に、「享保改革末期論」を発表されるはずでしたが、お気の毒に突然の交通事故で御欠席になりました。御快癒のうえ次回の御報告を期待したいと思います。

呉市史稿纂室千田武志先生は、資本と自治体との関係に焦点を据えて、昭和前期における広島県内の企業誘致の変質を系統的に究明されており、今回の「兩大戦間の企業誘致と地方自治体」では、大竹町・小方村当局の新興人絹誘致にたいする主導的ビヘイヴィアとその内因について、町村実勢をからめてうき彫りにされました。この御発表には、香川大学伊丹正博・岡山大学神立春樹両先生から、地場労働力や産業構成の変化など貴重な問題提起と示唆がありました。広島県史編さん室藤沢勇先生は、近世後期の「広島藩における藩札発行と物価の動向」について、財政補填と国益推進のための藩札増発によって弘化期の物価急騰を招いたが、その後維新までの増発では札価の下落

が生じてこないことを明らかにされました。ここには多くの興味あるテーマが伏在しており、研究の深化が期待されます。移民問題について緻密な研究を積重ねておられる広島県史さん籾室児玉正昭先生は、これまでの国内的な移民プッシュ要因の解明から視点をひろげ、ハワイにおける移民プル要因を分析されて、「領事報告からみた出稼移民の実態」を発表され、ハワイ糖業における雇傭条件の変化と広島山口出身移民の条件との合致を折出されました。ノートルダム清心女子短期大学尾野比左夫先生は、イギリス絶対主義成立期の財政政策が行政機構確立に果たした意義について研究をすすめておられ、島根大会での「ヘンリー7世の財政政策」について、今回の「ヘンリー8世の財政政策」では、1530年代の財務行政改革によるチェンバー体制の再編を財務官僚の形成＝近代的官僚組織の創始として位置づけられました。

第2日、山口大学木村忠夫先生の「豊臣期柳川立花家家臣団の形成」は、近世家臣団の創出過程として、ともに大友家被官の立花家と小野家その他の書状から、秀吉統一を機に与力の関係が主従に転化したことを解明されました。徳島県の同和教育研究室で資料の収集・教材化にたずさわっておられる武知忠義先生は、今日の同和教育推進のためにも戦前期の水平運動の対極に位置した融和運動を無視しえないとの観点から、「徳島県における融和運動」について、町村役場資料にもとづいて同県内の融和運動の成立・展開過程を全国的動向と対応させつつ概観されま

した。今後この運動の具体的実践が解明される必要を感じました。四国学院大学岡俊二先生は、「明治前・中期讃岐在来糖業の一特質」として、在村手作地主の製糖経営における生産工程・労働編成をモデル化し、地主製糖家と甘蔗作小農との賃労働慣行を摘出されました。広島県史編さん室藤原浩修先生による「朝鮮戦争期の広島における平和運動」は、ストックホルムアピール署名運動（1950年）から原水爆禁止署名運動（1954年）にいたる県内各団体の活動のなかから、原水爆問題・被爆者援護・基地問題が登場するプロセスを提示され、広島女子大学今堀誠二先生から、これらの問題と戦前の労働運動における平和思想・人権擁護思想との関係について示唆があり、広島女性史研究会今中保子さんからは、婦人団体の役割の解明が要請されました。最近の人民公社の実態を紹介されて

「中国農村社会の変貌」について発表された広島大学小林文男先生は、農業における生産責任制の拡大を中国社会主義体制の後退要因として指摘されました。

以上9名の方々の御発表は、いずれも今日的な産業・経済・社会の問題関心につらなっており、学界水準を地方において進展させるべき成果として評価されるものでした。参加者の貴重な御意見・討論は、さらに今後の研究の深化に生かされるものと思います。次年度もまた多くの興味ある御発表に期待を寄せて山口大学でお会いしましょう。

## 芸備地方史 研究会の歩み

芸備地方史研究会は、昭和28年8月に会誌『芸備地方史研究』第一号の発行によって、正式に発足した。昭和20年代前半の地方史研究の高まりの中、それまで長年地方史研究の隆盛に寄与されてきた魚澄惣五郎氏が中国文化賞を受賞されるに及んで、氏の功績を継承、発展するためにもというかたちで、会結成へと努力が重ねられた。特に在広島の若手研究者の組織化の気運が高まり、数回の予備会談が重ねられた。その結果、「高い学問的水準を求めると共に、広い基盤に立つ」という立場が確認されたが、これは本会の存在意義を考える上で、現在でも重要なこととして位置づけられる。会成立に至るまでには、以上のように多くの先輩方の情熱と努力があったのである。会成立以後の本会の歩みについては、昨年度30周年を迎えたことから、委員会でもまとめたものがあるが、そこでは、この30年を大きく2つの時期に区分して考えている。まず、初期の10年間を1つのまとまりとしてとらえている。この時期は、①委員会による会員への積極的な働きかけ、②多彩な啓蒙的企画の充実、③地域研究団体との積極的な交流という特徴をもつ。その間に、『人物広島史』や『広島県今と昔の産業』などの単行本の発行、「村の歴史をどのように考えてゆくか」、「地方史研究のあり方」などの特別企画が行なわれた。又各地に支部が設けられ、地方史研究の気運を一層盛り上げ、昭和38年11月には、中国文

化賞も受賞し、充実した活動期であった。次に、昭和38年以後現在に至る時期であるが、この時期は、会成立当初から問題であった、委員会と会員との懸隔が表面化し、これを埋める努力がつけられている。一方、昭和30年代末～40年代にかけてのいわゆる高度成長期の開発ブームの中での埋没文化財保存の問題、相次ぐ市町村史編纂の過程での史料保存問題等に様々な取り組みを試み、「県立文書館設立のために」、「神辺町立郷土資料館建設反対によせて」、「福山市に建設予定の県立博物館について」などを会誌に掲載した。又、この時期には、「学問の自由」「科学的歴史学」を堅持するという立場から、昭和41年以後いわゆる「建国記念の日」問題に取り組んできており、「建国記念の日のヒロシマ」のルポは現在でも続けられている。以上のように、この時期必ずしも活動は停滞してはいないが、やはり、芸備地方史研究会は今1つの曲がり角に立っているという感じは否めない。それは先述したごとく、委員会と会員との懸隔から生じる様々な問題を解決する方向性を見出せないでいることである。30年前、先輩方が確認された「学問的水準を保ち、かつ広い基盤に立つ」という視点をどう生かしてゆくか、大きな課題である。

(文責；奥山研司)

## 次年度当番校 からのご案内

小川 国治

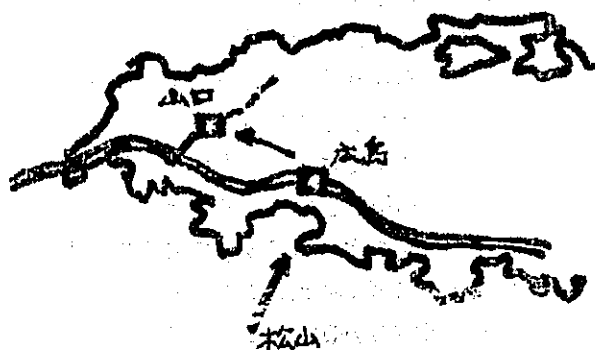
山口大学は、七つの学部と教養部及び二つの短期大学とからなっています。このうち山口市の吉田キャンパスには、本部和人文学部、教育学部、経済学部、歯学部、農学部、教養部が集まり、宇部市の常盤キャンパスには工学部と工業短大学部が、小串キャンパスには医学部と医療技術短期大学部があります。昭和四十八年に統合移転が完了した吉田キャンパスは、湯田温泉の南方約2kmに位置し、715,211㎡の広大な敷地と緑り豊かな環境に恵まれています。

山口大学は、戦後の学制改革によって昭和二十四年に創設されましたが、前身を辿れば幕末期の山口講堂にまでさかのぼることができます。文化十二年(1812)に上田鳳陽によって設立された山口講堂は、明治維新时期の動乱の中で、人材の養成機関として山口講習堂、遷校山口明倫館に発展し、山口大学の起源となりました。

山口市は、県庁所在地としては最も小さな都市ですが、「西の京」といわれるように、多くの歴史を秘め、静かな落ち着いた雰囲気をもつ町です。山口の町は、正平十四年(1359)に大内弘世によって造られ、以後大内義隆が敗死するまでの約200年間守護大名大内氏の本拠が置かれていました。大内氏は守護大名としての力を背景として明

国や朝鮮国と貿易を行い、巨万の富を入手し、この財力をもとに雪舟で代表される文化人を庇護したため、山口の町が「西の京」といわれるようになりました。今日でも山口の町には、浄瑠璃光寺(香積寺)の五重塔や雪舟庭(常栄寺枯山水庭)など、大内文化を伝えるものが多く残っています。

山口の町は、明治維新発生の地としても著名であり、山口藩庁門や枕流亭など維新に関係の深い建物も現存しています。また、山口の町を流れる一の坂川は、「蝨の川」として知られ、初夏の夕暮れには無数の蝨が飛び交います。



明治維新後山口

事務局の怠慢と非能率のために、『会誌』編纂が大極に遅れましたことを、お詫びしなくてはなりません。とりわけ今回は、島根大学の内藤先生をはじめ、おおくの方々からの投稿を戴いて居りましただけに、申し訳もありません。御投稿戴いた原稿に関しましては、ほどなく新たな『会誌』を発行予定しておりますので、そこに掲載させて載せます。このてん、大方の御寛恕を乞う次第です。